

個人の幸福と社会の福祉を増進することは云うまでもない。

ところがその徳性が、教育によつて養い得るものであるか否かといふことは、ギリシャの昔にかのソクラテスが「徳は教え得るか」という命題を提出して以来、教育上最も重要な問題の一つとなつてゐる。

この「徳は教え得るか」という問に対し、ペスタロッチーとフレーベルはイエスと答へてゐる。すなわち母と子との日常生活において、また遊びや遊戯において、宗教と道德との芽生えを十分にはぐくむことが出来るのである。

このようにして幼児期に養われる宗教心、道徳性が、後の健全な宗教・道徳の基礎であることを思つとき、われわれは一層幼児教育の重要性を痛感するのである。

## 幼児の

### 道徳性診断テストについて

香川大学

佃範夫

道徳的判断、道徳的心情、道徳的行動を道徳性評価の主要な三方に向とし、道徳的判断に自主性、創造性(探究心)、責任感、正義、公徳心、人権の六項目を、道徳的心情に明朗性、感謝(誠実)、宗教性

親孝行、兄弟友愛、協同性、親切、博愛の七項目を、道徳的行動(習慣)に健康、規律、礼儀、勤労、愛物(節儉)忍耐の六項目を選び、幼児道徳性診断テストを作成した。すなわち前述の各項目について二三個の問題を作り、五〇〇名の幼児に予備テストを試み、各問題に弁別力があるか否かを検討し、不適当と思われるものを除いた。もちろん弁別力のあるか否かを検討し、不適当と思われるものを除いた。もちろん弁別力があるか否かを検討し、不適当と思われるものを除いた。

このテストは、従来の多くの研究のように抽象的な文字やことばによるものではなくて、幼児の具体的な日常生活の経験を通して、極めて自然的に判断出来るように、特に絵によつて子ども自身に反応させるようにし、ここにこのテストの一つの大きな特色をだそうとした。

また個人、家庭、社会など幼児の生活環境に応じて問題を構成し、それぞれの領域における欠陥を診断し、直接役立つように、これららの領域に応じてテストを再構成し、テスト1からテスト4までの四つのテストとした。なおテストの要領を理解させると共に以後のテストを順調に進める為最初に練習問題を入れた。

次にこのテストの妥当性、信頼性、採点法及び道徳性偏差値などの問題がおこつてくるが、これらの問題については次の機会に報告したいと思っている。

(具体的テストを掲載したいと思うが、テストが絵であるため凸版の都合上ここに示されないのが残念であるが御了承いただきたい。)